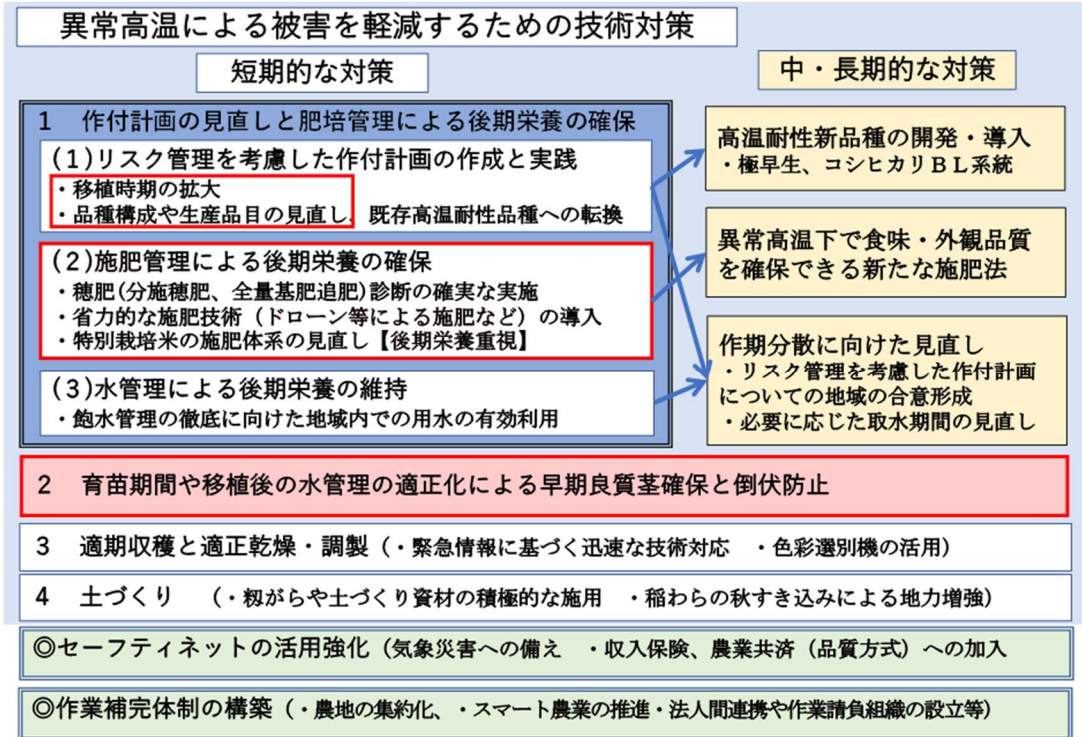


令和7年産米の重点技術対策について

新潟県農林水産部

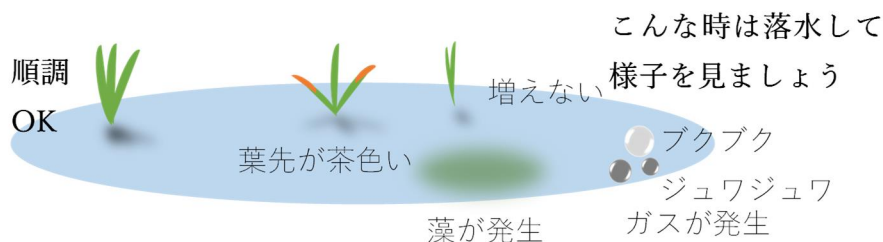
令和6年産米の作柄・品質及び倒伏の状況等を踏まえ、令和7年産に向けた技術対策を改めて整理しました。

初期生育管理から高温などの異常気象に備えた技術対策を実践し、外観品質と収量の安定確保をめざしましょう。



1 初期生育確保のための適正管理(播種～中干し前)

- (1) 移植日から逆算して、適正育苗期間になるように播種日を決め、老化苗の発生を防止しましょう。
- (2) 高温対策被覆資材を活用し、苗ヤケを防止しましょう。
- (3) 収穫後の「ひこばえ」や消雪後雑草など春に未分解の有機物のすき込みが多く、高温・多照となった場合は「ワキ」が多く発生します。「ワキ」の発生による初期生育の停滞が見られたら、一時的に落水し、夜干し(ガス抜き)等を行い根腐れや生育停滞を防止しましょう。



2 施肥管理による後期栄養の確保

- (1) 幼穂形成期に1回目穂肥施用のための生育診断を行い、穂肥の量と時期を判断し、倒伏や籾数過剰を防ぎましょう。
- (2) 2回目穂肥は後期栄養を確保するため、葉色から施用量の加減を判断し、確実に施用しましょう。
- (3) 登熟期間の高温に対応するため、3回目穂肥や全量基肥での追肥を葉色と気象庁の1カ月予報から必要性を判断し、必要に応じ施用してください。
- (4) 地際から穂首までの茎は、長さを稈長と呼び、5～6節に分かれており下の節間から順に伸びていきます。基肥は下の節間の伸びに影響し、下の節間が長いと倒伏しやすい傾向がありますが、2回目穂肥時期以降の追肥は節間（稈長）の伸びには影響しません。

コシヒカリの生育診断

基肥一発肥料+追加穂肥 (コシヒカリ)

2回目時期
出穂予測の10日前頃
葉色を測定して**診断**する

葉色が淡ければ
すぐに追加

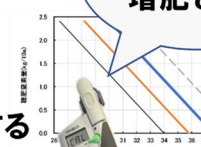


分施肥系の追加穂肥(コシヒカリ)

1回目時期
出穂18～15日前
幼穂形成期に生育調査をして**診断**する

幼穂形成期の 草丈(cm) × 葉色(SPAD)	幼穂伸長期の気象予報		
	低温・少照・多雨	平年並	高温・多照・少雨
2500未満	○△	◎	◎
2500～2800未満	×	×	○
2800以上	×	×	×△

2回目時期
出穂10日前頃
出穂予測の10日前頃
葉色を測定して**診断**する



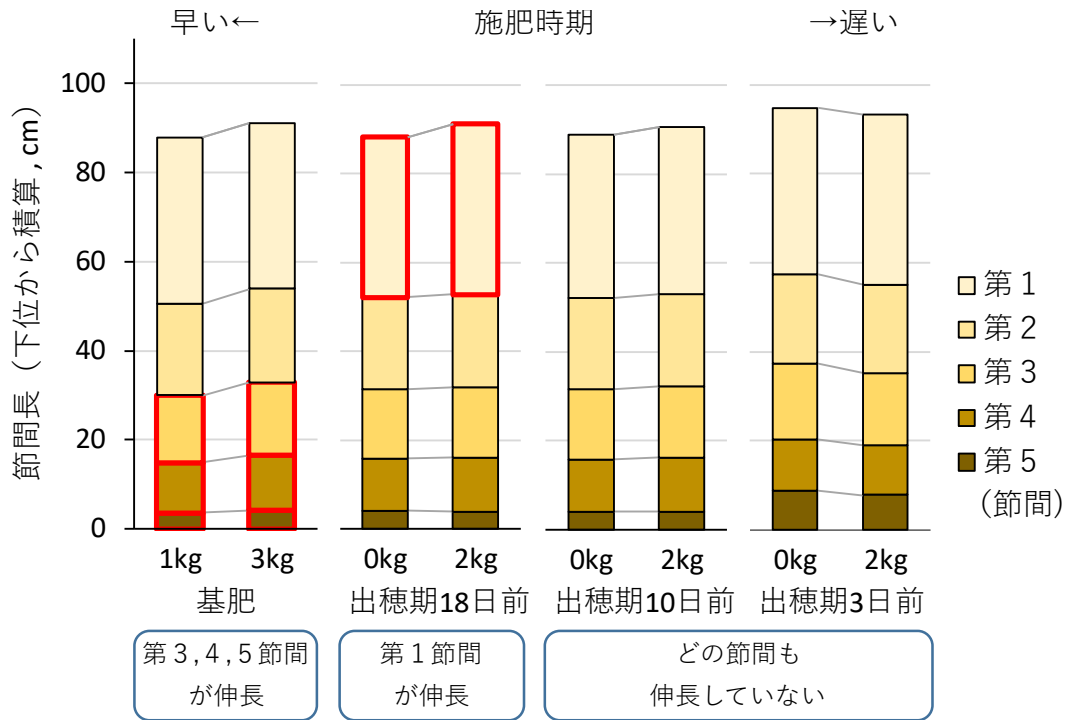
葉色が淡ければ
増肥もあり

3回目時期
出穂3～6日前
葉色を測定して**診断**する

葉色が淡ければ
すぐに追加

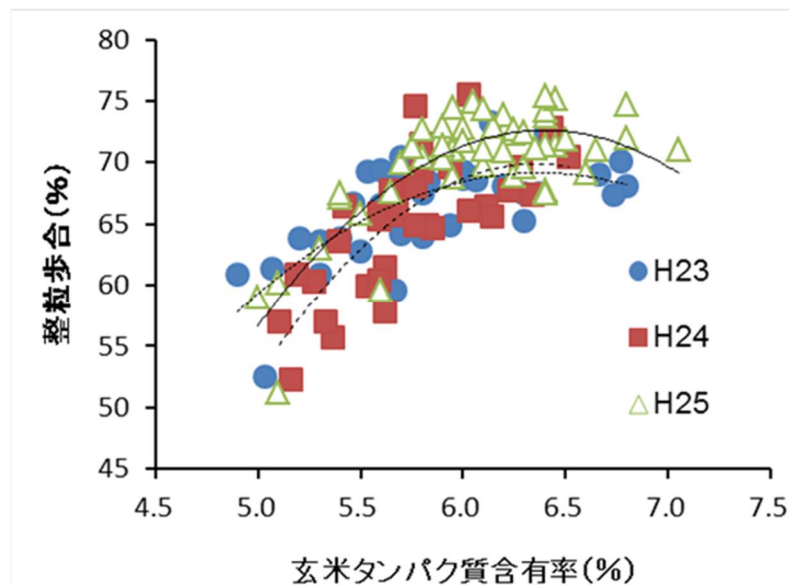
施肥体系	目標時期と葉色	施肥量
全量肥料	出穂前10日前	2kg/10a
分施肥系	幼穂形成期	2kg/10a
分施肥系+追加穂肥	幼穂形成期	2kg/10a

2回目穂肥時期以降の追肥は、稈長の伸びに関係しません



基肥・出穂期 18 日前・10 日前穂肥：H27、3 日前穂肥：R6
(農業総合所作物研究センター)

- (5) 背白粒・基部未熟粒は登熟期の高温で発生が増加します。特に基部未熟粒は、出穂期の葉色値が低いほど、また、登熟期間の葉色低下が大きいほど増加します。また、玄米タンパク質含有率が低すぎると外観品質が低下します。生育診断で施肥時期や量を見極め、確実に穂肥を施用しましょう。



コシヒカリの整粒歩合と玄米タンパク質含有率の関係
(平成 23～25 年産コシヒカリ、農業総合研究所作物研究センター)

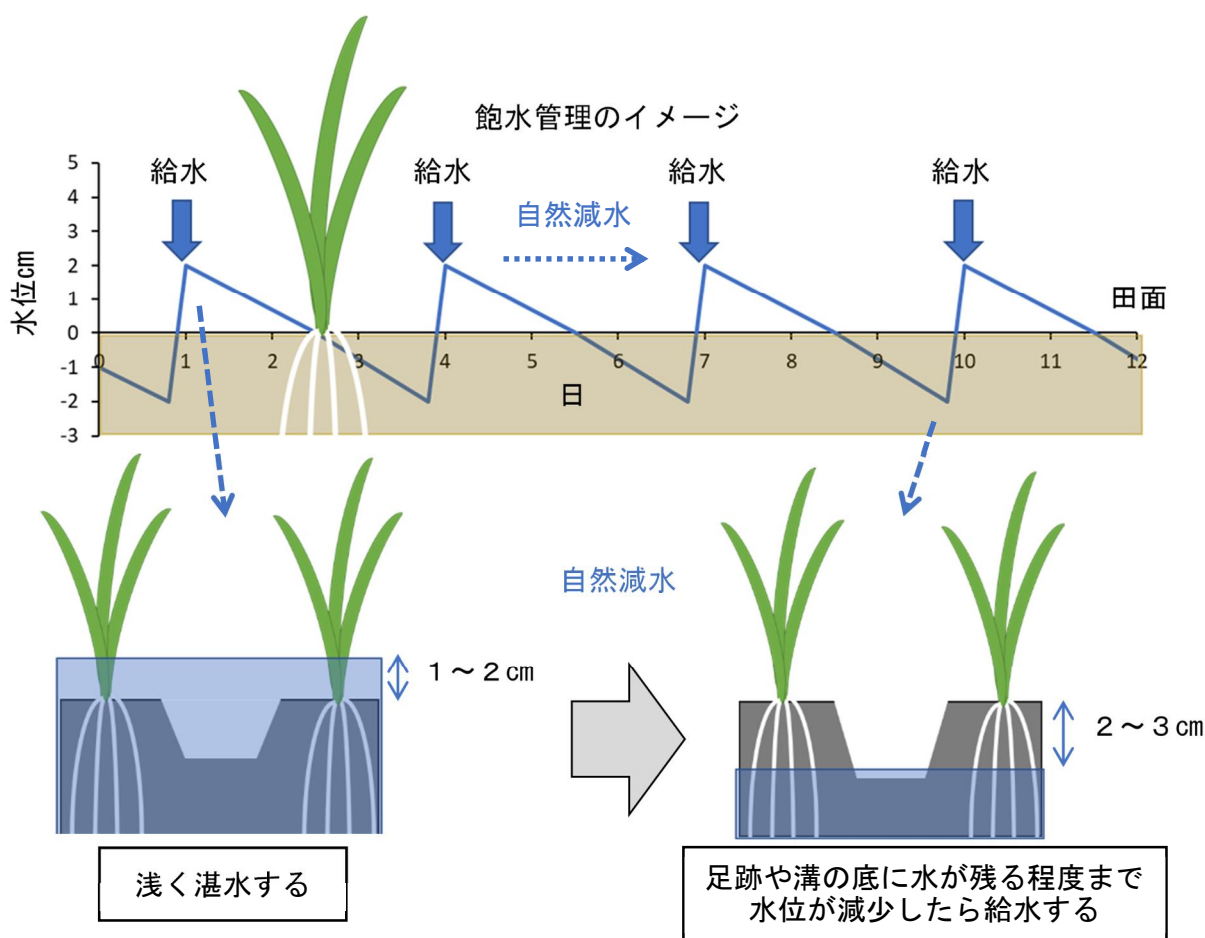
- (6) 減化学肥料栽培では、出穂後の高温に備え、追加穂肥に速効性の化学肥料が施用できるように基肥の有機質肥料と化学肥料の配分を検討しましょう。
- (7) 穂肥の施用には、流し込み施肥やドローン利用などの省力的な散布方法を検討しましょう。
- (8) 穂肥施用は、暑い時期の作業になるので、作業環境の確認や作業時間の管理など職場の熱中症対策にはしっかりと取り組みましょう。
- (9) 令和6年度に窒素施肥量の地域慣行栽培基準は見直しました。詳細は県ホームページで確認してください。



<https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/nosanengei/ninshou.html>

3 水管理による後期栄養の維持

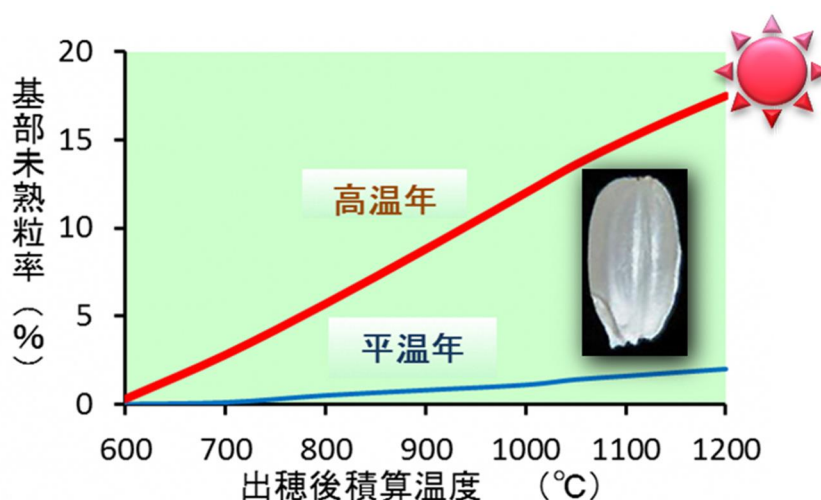
- (1) 中干し以降は飽水管理を行い、限りある用水を有効に活用しながら地温上昇を抑えるとともに根腐れを防ぎましょう。



- (2) 異常高温時には飽水管理を継続し、湿った状態を維持しましょう。
- (3) フェーン等の高温乾燥や強風が予想される場合には、事前に浅く湛水しましょう。フェーン後は速やかに落水し、飽水管理に戻しましょう。暑い時期の溜め水は根腐れの危険性があります。
- (4) ほ場の落水時期は出穂期 25 日後以降とします。ただし、高温が予想された場合は、出穂期 30 日後まで飽水管理を継続するか、かん水可能期間の最終日に十分湛水するとともに暗渠栓の開栓を可能な限り遅くして土壌水分を保持しましょう。
- (6) 緊急的な水管理が行えるよう、地域の効率的な水利用について、事前に地域で検討しておきましょう。

4 適期収穫と適正乾燥・調製

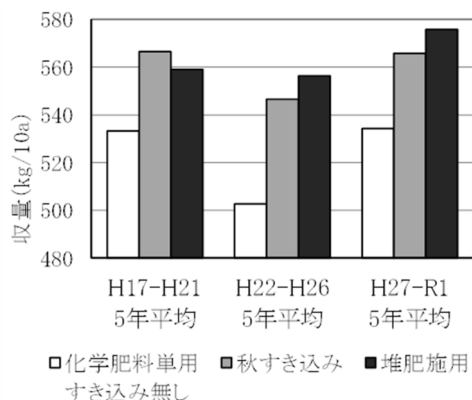
- (1) 収穫適期は、地域の技術情報（出穂後の積算気温や積算気温 800℃の外観品質情報等）や最新の気象情報、籾黄化率に基づいて判断しましょう。
- (2) 茎葉や穂軸は青くても籾は成熟している場合があるので、穂を確認し籾の黄化率が 85～90%くらいになった頃をめやすとしてください。
- (3) 登熟期間に高温が続くと、収穫適期が早まり収穫適期期間も短くなるため、刈り遅れになりやすいです。適期に収穫しましょう。



- (4) 登熟期が高温の年は基部未熟粒によって外観品質が低下しやすいので、登熟期間の気温に応じて、収穫開始を積算気温で 50～100℃（2～4 日程度）早めて収穫してください。
- (5) 整粒歩合を高めるため、品種による粒大や未熟粒の多少に応じて適切なふるい目を使用しましょう。また、未熟粒や着色粒、カメムシ類による斑点米の発生が多い場合は、色彩選別機を利用しましょう。

5 土づくり

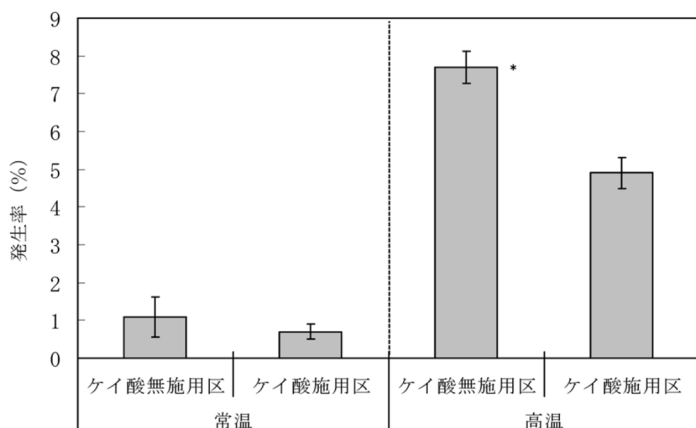
- (1) 土壌診断に基づいて堆肥や土づくり資材を施用し、地力を増強しましょう。
- (2) 稲わらの秋すき込みは、堆肥施用と同等の「土づくり」効果が期待できます。また、水田の保水力が高まり、干ばつやフェーン等に対する稲の抵抗力が大きくなり、収量・外観品質が安定します。
- (3) 稲わらの秋すき込みは春すき込みと比べ、「ワキ」の発生防止や温室効果ガスであるメタンの発生抑制に効果があります。



有機物長期連用による収量推移 (H17年～R元年、農総研基盤)

※コシヒカリ場内・現地の2ほ場平均

- (4) 籾殻はケイ酸成分が重量で約2割含まれる有用資源です。10aの水田から120kg程度の籾殻が得られ、水田から得られた量の2倍の250kg程度の施用までは水稲の生育に影響がありません。積極的に施用しましょう。籾殻が1か所に偏ると、初期生育が悪くなる可能性があります。専用散布機等を利用して籾殻を均一に散布しましょう。



籾殻散布機

ケイ酸施用が乳白粒の発生率に及ぼす影響

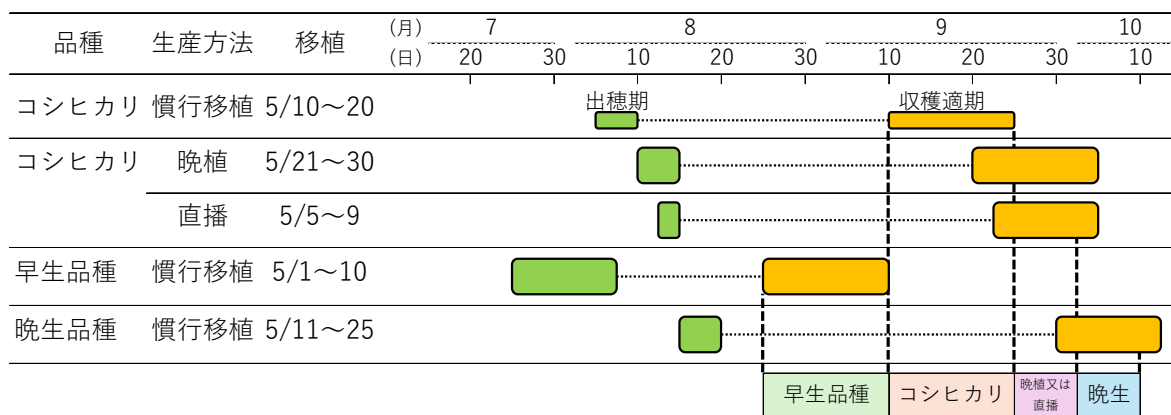
(2011年、ポット試験)

(金田、2018)

6 リスク管理を考慮した作付計画の作成と実践

- (1) 異常気象に遭遇するリスクを分散するため、栽培面では移植時期の分散や直播栽培の導入、品種面では熟期の異なる品種や高温に強い品種を導入し、作付計画を見直しましょう。
- (2) 作付計画の見直しにあたっては、用水の取水期間を確認しましょう。

作付計画（熟期分散）検討イメージ



品種別の熟期と高温耐性のめやす

	弱	やや弱	中	やや強	強
極早生 ・早生	新潟次郎		葉月みのり つきあかり ゆきの精 ちほみのり	ゆきん子舞 こしいぶき	新潟135号 (R8一般栽培予定)
中生		コシヒカリ		にじのきらめき	
晩生		みずほの輝き	あきだわら		新之助